



平成30年度 企画展①

中世陶器の魅力

— 権山の中世陶器 part3 —



鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

はじめに

鈴鹿市加佐登町に所在する椎山中世墓は、昭和52年に発掘調査が実施されました。墓域のほぼ全域が調査された例として、また、斜面を階段状に造成した独特な構造から全国的に注目され、中世考古学史のうえでも重要な遺跡です。

なかでも、骨臓器として使用されていた中世陶磁器は多様性に富み、東海地域における陶磁器の流通と消費を知るうえで貴重な一括資料となっています。そのため主要なものは、平成13年に市の有形文化財に指定されました。普段は加佐登神社境内の高宮資料館に大切に保管されているこの貴重な資料を多くの方に知っていただこうと、当館では機会を見て展覧会を開催してきました。前回の展示からすでに10年以上が経過しましたので、改めて椎山中世墓の優品を一堂に展示し、ご紹介したいと思えます。

また、今回の展示では「中世陶器の魅力」と題して、椎山中世墓から出土した常滑焼・古瀬戸焼を中心に、備前焼や越前焼など椎山中世墓にもたらされなかった主要な古窯の製品等もあわせて紹介します。中世の焼き物の特性をご理解いただき、実用的で素朴な焼き物が持つ独特の美しさと力強さを感じ取っていただきたいと思います。

椎山中世墓の発掘調査

椎山中世墓は、加佐登神社境内の南西部の斜面に位置していました。昭和46(1971)年、水資源開発公団は、国から継承した三重用水事業（農業用水ならびに都市用水を確保するための事業）で貯水量約300万トンの加佐登調整池(通称 白鳥湖)の建設を計画しました。

計画地内で現地踏査を行った結果、古墳2基、中世墓1基を確認し、保存のための協議を重ねましたが、遺跡の保存は困難であることから、やむなく発掘調査による記録保存を行うこととなりました。

椎山中世墓の発掘調査は、昭和52(1977)年6月～9月に実施されました。斜面には、平坦面が明瞭に認められ、表土を除去していくと配石群と蔵骨器（骨壺）が次々と確認されていきました。



写真上：調査前
下：調査後



調査の成果

台地の南斜面において、地山（人為的なものではなく、自然のままの地盤）を階段状に削りだして造成した4段の平坦面が検出されました。平坦面を上方から第Ⅰ～第Ⅳ段と呼んでいます。また、墓・蔵骨器については上段から下段、西から東へ通し番号を付けて、〇号墓（〇号蔵骨器）と呼んでいます。配石が残存していても蔵骨器が失われているものなどについては、単独の番号を与えるのではなく、右隣の配石遺構番号に「'」をつけています。

《第Ⅰ段》

1～8号蔵骨器が確認されました。東側で配石と蔵骨器が確認されました。地山直上に置かれていた6号蔵骨器を除き、小穴に蔵骨器を埋設した上に石を配置しています。配石は高さ30～40cmほどありましたが、個々の墓を明確にする区画は確認されていません。配石の背後には土壇が設けられ、石製の五輪塔が並べられていました。

《第Ⅱ段》

9～23号蔵骨器が確認されました。中央から西側は遺存状況が悪く、北辺の配石が確認されたのみでした。東側では配石がまとまって確認され、蔵骨器は密集して確認されました。第Ⅰ段と同じく、東側の配石では個々の墓は明確ではありませんが、中央から西にかけては残存する北辺の配石から個々の墓が推定可能と考えられます。



1・2・3号墓 蔵骨器出土状況

《第Ⅲ段》

24～38号蔵骨器が確認されました。配石は東西中央の3群が確認できました。攪乱された箇所もありますが、残っていた配石からは概ね個々の墓が推定できます。34号墓では約1mの方形に石を並べ、中央の小穴に蔵骨器を埋納した様子が確認されました。

《第Ⅳ段》

39～50号蔵骨器が確認されました。平坦面のほとんどが崩落してしまい、東側とわずかに中央部が残っていました。そのような中でも方形の配石は上段と比べて残りがよく、約1m四方に石が並び、中央に蔵骨器を埋設していました。ほかの段に比べて、個々の墓が独立していた様子が見られます。



34号墓 蔵骨器出土状況

椎山中世墓は、後世に散逸したことを考えても100基以上の墓が存在していたと考えられます。蔵骨器に使用された陶器の製作年代は、平安時代末から室町時代の約400年間になります。蔵骨器専用として焼かれたものではなく、日常使用していたものを転用した場合、製作年代と使用年代には時間差が生じますが、鎌倉時代から室町時代にかけて墓がつくられていったと考えられています。古い時期の陶器が下段に、新しい時期の陶器が上段に使用された傾向があり、下段から上段へ向かって造営されていったのでしょう。

ここに葬られた人々は、蔵骨器に高級品である古瀬戸の壺や瓶子を使用し、中国の青白磁合子を副葬することから、かなりの富裕層であったと思われます。

六古窯

小山富士夫氏は、現業として存続している窯業地の生産開始時期を探る調査・研究から鎌倉・室町時代の陶器生産が確認された瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前・越前を「日本六古窯」、「中世六古窯」、「六古窯」と呼びました。

小山氏が提唱したこの「六古窯」論によって、六古窯の陶器に対する評価が高まり、中世陶器を鑑賞する愛好家が増加するきっかけにもなりました。

その後、全国各地で国土開発に伴い発掘調査が増加すると、六古窯以外にも中世の窯跡が確認されるようになりました。そのため現在では、「六古窯」とは中世に生産を開始し、現在に至るまで製陶活動を継続している窯とされています。



主な窯跡の位置図

窯業の古代から中世への転換期は、畿内産瓦器椀、東播（播磨東部）系須恵器の生産開始、東海地方の灰釉陶器から無釉の山茶碗生産の成立などから平安時代後期の11世紀末と考えられています。中世陶器の主要器種とされる甕・壺・鉢の生産は、12世紀代に各地で開始します。

現在、須恵器系・瓷器系の窯跡は、全国で80ヶ所以上確認されています。東海地方は、そのうち30ヶ所近い窯が集中し、施釉陶器を生産した瀬戸窯、各地の窯の成立・生産に大きな影響を与えた常滑窯があり、最大の窯業生産地であったといえます。ちなみに三重県は、土師器系土器の生産が盛んな地域でした。

15世紀末頃になると窯は、瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前・越前の「日本六古窯」にほぼ集約されていきました。

やきものの系譜

榑崎彰一氏はやきものの窯業技術の系譜によって、3つに分類しました。

◎土師器系 縄文土器以降の土器づくりの技術によるもの

⇒ 土師器・瓦器

◎須恵器系 古墳時代以降の須恵器の技術を踏襲したもの

⇒ 須恵器系陶器

◎瓷器系 平安時代の灰釉陶器の技術を踏襲したもの

⇒ 施釉陶器・焼締陶器

※焼締陶器は、中世に新たに生産が始まり、中世を代表するやきものです。

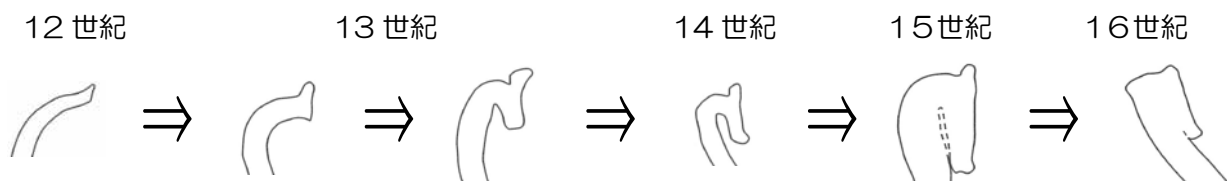
須恵器や灰釉陶器よりも高温で長時間焼成することでより硬く、保水性の高い製品が出来上がります。ただし、高温に耐えられる良質な陶土を使用しないと焼成時に崩れてしまいます。

常滑

知多半島のほぼ全域に広がる窯の数は、2000 基を超えといわれ、全国最大級の窯業地です。焼締陶器の中心的産地で、各地の窯の成立・生産に多大な影響を与えています。

12 世紀初頭に山茶碗の生産が始まり、その後、甕・広口壺、三筋壺が生産されました。三筋壺は、肩から胴部にかけて三条の水平線を櫛やへうで刻んだもので、この文様について、宗教的な意味、木製桶の箍を表現したなど様々な説があります。

13 世紀になると甕・広口壺の量産体制は整い、三筋壺に代わり、玉縁壺が生産されるようになります。甕・広口壺の口縁部の形態には特徴があり、時代の経過とともに大きく変化していきます。



図版『愛知県史別編中世・近世常滑系』常滑窯製品編年表から引用
甕の口縁部の変化



1 三筋壺 平安時代末～鎌倉時代初頭
椎山中世墓 8号蔵骨器
高宮資料館所蔵



2 二筋壺 平安時代末～鎌倉時代初頭
椎山中世墓 35号蔵骨器
高宮資料館所蔵



3 三筋壺 平安時代末～鎌倉時代初頭
椎山中世墓 50号蔵骨器
高宮資料館所蔵



4 三筋壺 平安時代末～鎌倉時代初頭
椎山中世墓 44号蔵骨器
高宮資料館所蔵



5 三筋壺 鎌倉時代
椎山中世墓 40号蔵骨器
高宮資料館所蔵



6 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 37号蔵骨器
高宮資料館所蔵



7 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 32号蔵骨器
高宮資料館所蔵



8 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 47号蔵骨器
高宮資料館所蔵



9 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 30号蔵骨器
高宮資料館所蔵



10 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 31号蔵骨器
高宮資料館所蔵



11 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 38号蔵骨器
高宮資料館所蔵



12 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 45号蔵骨器
高宮資料館所蔵



13 玉縁壺 鎌倉時代
椎山中世墓 18号蔵骨器
高宮資料館所蔵



14 玉縁壺 鎌倉時代～室町時代
椎山中世墓 41号蔵骨器
高宮資料館所蔵



15 玉縁壺 室町時代
椎山中世墓 14号蔵骨器
高宮資料館所蔵



16 玉縁壺 室町時代
椎山中世墓 33号蔵骨器
高宮資料館所蔵



17 玉縁壺 室町時代
椎山中世墓 15号蔵骨器
高宮資料館所蔵



18 広口壺 鎌倉時代
椎山中世墓 43号蔵骨器
高宮資料館所蔵



19 広口壺 鎌倉時代～室町時代初頭
椎山中世墓 19号蔵骨器
高宮資料館所蔵



20 広口壺 鎌倉時代～室町時代初頭
椎山中世墓 48号蔵骨器
高宮資料館所蔵



21 広口壺 鎌倉時代～室町時代初頭
椎山中世墓 28号蔵骨器
高宮資料館所蔵



22 広口壺 鎌倉時代～室町時代初頭
椎山中世墓 42号蔵骨器
高宮資料館所蔵



23 広口壺 室町時代
椎山中世墓 39号蔵骨器
高宮資料館所蔵



24 広口壺 室町時代
椎山中世墓 13号蔵骨器
高宮資料館所蔵



25 広口壺 室町時代
椎山中世墓 11号蔵骨器
高宮資料館所蔵



26 広口壺 室町時代
椎山中世墓 5号蔵骨器
高宮資料館所蔵

※1～32・47は
鈴鹿市指定文化財

瀬戸

瀬戸窯は、瀬戸市を中心に尾張旭市、長久手市北部、豊田市の一部に分布し、1000基ほどの窯跡が確認されています。10世紀の灰釉陶器から始まり、11世紀末には山茶碗へと転換、12世紀末から中国陶磁を模倣した施釉陶器の生産が始まりました。無釉の陶器でも窯の中で自然に灰がかかり、口縁部や肩部に釉薬を掛けたような状態になることもありますが、「古瀬戸」と呼ばれる瀬戸の施釉陶器は、釉薬をハケで塗る、浸す、流し掛けるなどして全面に施しています。

中世の施釉陶器は、渥美窯や東濃窯（岐阜県）などで一時的な生産が確認されていますが、継続して生産を行ったのは、瀬戸窯のみです。

12世紀末、淡緑色の灰釉から始まり、13世紀末には黒褐色・茶褐色の鉄釉が開発されました。その製品は全国各地へと運ばれ、中国陶磁にかわる高級品として扱われていました。



27 灰釉四耳壺 鎌倉時代
椎山中世墓 46号蔵骨器
高宮資料館所蔵



28 灰釉四耳壺 鎌倉時代
椎山中世墓 17号蔵骨器
高宮資料館所蔵



29 灰釉四耳壺 室町時代
椎山中世墓 4号蔵骨器
高宮資料館所蔵



30 注口壺 室町時代
椎山中世墓 3号蔵骨器
高宮資料館所蔵



31 鉄釉四耳壺 室町時代
椎山中世墓 1号蔵骨器
高宮資料館所蔵



32 鉄釉四耳壺 室町時代
椎山中世墓 2号蔵骨器
高宮資料館所蔵



33 灰釉瓶子 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵



34 灰釉印花文瓶子 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵



35 灰釉画花文瓶子 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵



36 灰釉魚文四耳壺 室町時代
愛知県陶磁美術館所蔵



37 鉄釉草花文広口壺 室町時代
愛知県陶磁美術館所蔵

越前

越前窯は、福井県丹生郡越前町（旧宮崎村・織田町）に分布し、200基以上の中近世の窯跡が知られています。

常滑窯から技術導入して、12世紀後半頃に成立しました。そのため、常滑の製品ととても似ています。特に三筋壺は常滑産と区別がつかないほど似ていますが、胎土の違いから見分けることができる場合があります。越前の土は、白色で常滑よりも良質で耐火度も高く、より高温で焼成できるため、硬く焼き締まって光沢があります。

徐々に常滑の影響下から脱却し、14世紀以降、口縁部の形態に違いが見られ、肩部の張りがなくなるなど独自の製品へと変化していきます。

高い品質の越前焼は、日本海側の各地に運ばれていきました。



38 三筋壺 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵



39 印花文壺 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵

丹波

丹波窯は、兵庫県篠山市に分布しています。生産の開始は、発掘調査では明らかになっていませんが、出土品などから12世紀代にさかのぼると考えられています。窯跡は8基ほどしか確認されていませんが、丹波焼と思われる製品は、伝世品も含めて数多くあり、未確認の窯跡が存在したと考えられています。

丹波焼は、東播系中世須恵器の生産技術を基盤として、東海地方の瓷器系陶器の技術を受けて成立した窯です。常滑の甕や瀬戸の壺に類似した製品が生産され、その後、備前焼の影響を受けながら14世紀から15世紀には地域独自の製品へと変化していきます。丹波窯の製品は、耐火度の高い白色の粘土を用い、よく焼き締められた褐色の器面は光沢があり、淡緑色の自然釉が掛かったものが多くみられます。



40 瓶子 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵

備前

備前窯は、岡山県備前市伊部地区に分布し、100基以上の中近世の窯跡が知られています。六古窯のなかで、須恵器系陶器の生産をおこなっていた窯です。

平安時代の須恵器生産の技術・形態をそのまま引き継いだ生産は、鎌倉時代前期まで続きました。

鎌倉時代中期以降は、製品を甕・壺・鉢に集約し、器面が灰色の須恵器系陶器から赤みをもつ焼締陶器の生産に転換します。

甕・壺の口縁部は玉縁状に作っています。壺には櫛目の条線で文様を施しています。器壁が厚くなり堅牢化した製品は、西日本を中心に全国へと運ばれました。



41 櫛目文瓶子 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵

信楽

信楽窯は、滋賀県甲賀市に分布し、207基の中近世の窯跡が知られています。現在確認されている生産の開始時期は、遅くとも13世紀の中頃と考えられており、六古窯のなかで最も遅れて生産が開始されました。

常滑の技術が導入されたと考えられており、常滑の甕・広口壺に特徴的な口縁部の形態である断面がN字状の甕が生産されていますが、14世紀代以降、独自の形態へと変化していきます。

壺の肩部に施される桧垣文（2条の平行線の中に斜線・格子状・矢羽状の文様を加えたもの）は、信楽特有の文様です。



42 壺 室町時代
愛知県陶磁美術館所蔵

渥美

愛知県豊橋市南西部から渥美半島に窯が分布しています。古代灰釉陶器も生産されており、古代から連続する中世窯とみられ、500基以上の窯が存在していたと考えられ、14世紀初頭には生産が終わったと考えられています。

12世紀の前半から12世紀末頃まで生産された壺には灰釉を施釉していました。これは瀬戸窯の施釉陶器に先行するものです。

愛好家の間で蓮弁文を施した「黒い壺」の生産地を探求する活動が行われ、「黒い壺」の生産地が渥美であると明らかにされました。

特徴的な「黒い壺」は、須恵器のように焼成したためです。灰釉を施釉し、肩部には秋草や葦鷺、袈裟襷、蓮弁など様々な美しい文様が施された製品は、特注品と考えられています。



43 双耳壺 平安時代
愛知県陶磁美術館所蔵



44 灰釉芦鷺文三耳壺 平安時代
重要文化財
愛知県陶磁美術館所蔵※



45 灰釉蓮弁文壺 平安時代末
愛知県陶磁美術館所蔵



46 瓶子 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵

産地不明



47 灰釉四耳壺 不明
高宮資料館所蔵

珠洲

珠洲窯は、石川県珠洲市、旧珠洲郡内浦町に分布し、約 40 基の窯跡が確認されています。12 世紀の中葉から 15 世紀末まで、須恵器系陶器の生産が行われました。

須恵器の甕の成形技法といえば叩きです。珠洲焼は、甕・壺の成形に平行線を刻みつけた道具を使い、腰から頸部まで縦列で揃え、交互に向きを変えながら綾杉状の文様のようになっています。

珠洲窯は能登半島の先端に位置しています。その地の利を活かし、日本海側の広範囲に流通していましたが、製品の粗雑化によって、その生産は衰退してしまいました。



48 櫛目印花文壺 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵



49 叩文壺 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵

美濃須衛

岐阜県各務原市を中心に岐阜市・関市にかけて分布し、古墳時代後期（6 世紀後葉）から鎌倉時代前期（13 世紀半ば）まで約 700 年間にわたって須恵器・灰釉陶器・山茶碗を生産していた窯跡群を総称して美濃須衛古窯跡群と呼び、500 基以上の窯があったと考えられています。

山茶碗とともに瓷器系の焼締陶器が生産され、12 世紀から 13 世紀前半代に中国宋代の白磁四耳壺を祖形とした四耳壺を中心として、瓶子・水注などが生産されていました。

ロクロによる丁寧な成形で、施釉陶器のような自然釉が掛かっています。



50 四耳壺 鎌倉時代
愛知県陶磁美術館所蔵



51



52



53



54



55



56



57



58



59



押印文



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75

今回、参考展示として、押印文のある甕や皿を展示しています。甕は、成形する際に粘土の接合部分をより密着させるためにタタキや押印をおこなったと考えられています。単純な文様から装飾性の豊かなものまで、様々です。

皿の見込みの見込みに押印された文様は、現在でもモチーフとして利用できるような文様です。

51～56：桜鐘古窯群 鎌倉時代 57～60：夏敷古窯跡 鎌倉時代 61～69：桑下東窯跡 室町時代

70～75：上品野西金地遺跡 室町時代 愛知県埋蔵文化財調査センター所蔵 愛知県埋蔵文化財センター提供

展示資料一覽

No.	資料名	遺跡名	所在地・出土地	所蔵機関	時代	産地	写真番号	点数	備考
1	三筋壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	平安時代末～ 鎌倉時代初頭	常滑	1・3・4	3	鈴 鹿 市 指 定 文 化 財
2	二筋壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	平安時代末～ 鎌倉時代初頭	常滑	2	1	
3	三筋壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	鎌倉時代	常滑	5	1	
4	玉縁壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	鎌倉時代	常滑	6～13	8	
5	玉縁壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	鎌倉時代～ 室町時代初頭	常滑	14	1	
6	玉縁壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	室町時代	常滑	15～17	3	
7	広口壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	鎌倉時代	常滑	18	1	
8	広口壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	鎌倉時代～ 室町時代初頭	常滑	19～22	4	
9	広口壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	室町時代	常滑	23～26	4	
10	注口壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	室町時代	瀬戸	30	1	
11	灰釉四耳壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	鎌倉時代	瀬戸	27・28	2	
12	灰釉四耳壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	室町時代	瀬戸	29	1	
13	灰釉四耳壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	不明	不明	47	1	
14	鉄釉四耳壺	椎山中世墓	鈴鹿市加佐登町	高宮資料館	室町時代	瀬戸	31・32	2	
15	灰釉瓶子			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	瀬戸	33	1	
16	灰釉印花文瓶子			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	瀬戸	34	1	
17	灰釉画花文瓶子			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代末	瀬戸	35	1	
18	灰釉魚文四耳壺			愛知県陶磁美術館	室町時代	瀬戸	36	1	
19	鉄釉草花文広口壺			愛知県陶磁美術館	室町時代	瀬戸	37	1	
20	三筋壺			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	越前	38	1	
21	印花文壺			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	越前	39	1	
22	瓶子			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	丹波	40	1	
23	櫛目文瓶子			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	備前	41	1	
24	壺			愛知県陶磁美術館	室町時代	信楽	42	1	
25	双耳壺			愛知県陶磁美術館	平安時代	渥美	43	1	
26	灰釉芦鷺文三耳壺			愛知県陶磁美術館	平安時代	渥美	44	1	
27	灰釉蓮弁文壺			愛知県陶磁美術館	平安時代末	渥美	45	1	
28	瓶子			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	渥美	46	1	
29	櫛目印花文壺			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	珠洲	48	1	
30	叩文壺			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	珠洲	49	1	
31	四耳壺			愛知県陶磁美術館	鎌倉時代	美濃須衛	50	1	
32	壺・甕	桜鐘古窯群	愛知県知多市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	鎌倉時代	常滑	51～56	14	
33	甕	夏敷古窯跡	愛知県常滑市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	鎌倉時代	常滑	57～60	5	
34	甕・壺	刀池古窯跡群	愛知県知多市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	鎌倉時代	常滑	—	5	
35	端反皿	桑下東窯跡	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	室町時代	瀬戸	61～69	15	
36	端反皿	上品野西金地遺跡	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	室町時代	瀬戸	70～75	7	
37	折縁直縁皿	鶯窯跡	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	室町時代	瀬戸	—	1	
38	折縁深皿	鶯窯跡	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	室町時代	瀬戸	—	2	
39	中鉢	鶯窯跡	愛知県瀬戸市	愛知県埋蔵文化財 調査センター	室町時代	瀬戸	—	2	

《例言》

- 1 本書は、平成 30 年度 鈴鹿市考古博物館開館企画展「中世陶器の魅力―権山の中世陶器 part3 ー」の開催に際し、作成した展示図録です。
- 2 本書の執筆・編集は、吉田真由美が担当しました。
- 3 本書に使用した写真のうち、各所蔵機関から提供を受けたものを使用しました。高宮資料館所蔵品については、田中久生氏（三重県埋蔵文化財センター）の指導の下、吉田が撮影しました。
- 4 掲載写真は、全ての展示品ではなく、パネルでの展示資料についても掲載しました。※印があるものが写真パネルでの展示です。

《主な参考文献》

愛知県 『愛知県史 通史編2 中世1』2018

愛知県 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』2007

愛知県 『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』2012

愛知県陶磁美術館ほか 『古陶の譜 中世のやきもの 一六古窯とその周辺一』2010

全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集 発表要旨集』2005

※各窯跡の調査報告書は省略しました。ご了承ください。

《謝辞》

本展覧会の開催及び本書の作成にあたり、下記の機関のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

愛知県陶磁美術館・愛知県埋蔵文化財調査センター・（公財）愛知県埋蔵文化財センター・加佐登神社・高宮資料館・三重県埋蔵文化財センター・鈴木信彰・畑中英二・大西遼・岡田浩季・堀木真美子・水谷侃司・田中久生

平成 30 年度企画展展示図録
「中世陶器の魅力―権山の中世陶器 part3 ー」
編集発行 鈴鹿市考古博物館
発行日 平成 30 年 10 月 27 日



鈴鹿市考古博物館
Suzuka Municipal Museum of Archaeology